

東方兄妹伝

新壇幻夢 & 天地エリナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

親を亡くした2人の兄妹

ある日突然見知らぬ土地へ来た

そこで観る運命とは……

イメージOP『Re：birthed』

イメージED『HEROES』

エリナ戦闘bgm『Megalos Strike Back』

幻夢戦闘bgm『Megalos Grilled Back』

今回出る主人公は、苗字を変えた自分達の参加です

そこんとこ宜しくです

入りきらなかったタグ（入ってる奴含め）紹介

- ・ 兄妹作
- ・ 兄妹同時投稿
- ・ 多重クロス
- ・ 銃や剣
- ・ 殺戮の天使（キャラが使っている武器のみ）
- ・ 仮面ライダー（一部アイテムのみ）
- ・ dmc デビルメイクライ（DTのみ）
- ・ デビルメイクライ4（レッドクイーンのみ）
- ・ PROTO TYPE（全身アーマー&グラインドのみ）（グラインドは滑空ではなく、自由に飛び回れる）
- ・ フレームアームズガール

- ・ペルソナ
- ・オリジナルペルソナ設定
- ・オリキャラ
- ・オリジナルウエポン
- ・オリジナルアビリティ
- ・フラン
- ・こころ
- ・キャラ崩壊気味
- ・他作品の敵キャラ
- ・申し訳程度の他作品キャラ
- ・タグ追加予定

目次

く兄く	1
兄の目覚め	1
自分の能力と屋敷	5
練習と再会	9
く妹く	13
妹の目覚め	13
く兄妹く	17
兄との再会	17
人里	20
戦闘&エリナ「あっそういえば」	23
ガシャットパワーと更なる出会い	27
人里で……	30
新・武装	34
フランとの遊び	37
新・仲……… 間?と……… カード	40
異変	44
異変目的地	47
地底の住人	50
第2住人	53
第3住人	55
響く鬼?響かない鬼?	58
エリナ視点	64
幻夢その後	67
こいしと出会った	70

久し振りだなあ！皆様あ！

ようこそ地霊伝へ

く番外編く

幻夢の一日

73

76

80

く兄く

兄の目覚め

幻夢

気がつくくと、だだっ広い野原の様な場所にいた
周りを見渡しても、ほとんど何も無い

そこで一つ、気づく事が

幻夢「……………！エリナは?!」

妹のエリナが見当たらないのである

自分の持っていた荷物はあるが、エリナとエリナの荷物が無い
きつと迷子なんだ

俺は、急いで探そうと、当てもなく歩き始めた

しばらく歩くと、巨大な木を見つけた

とても大きいので、しばらく見ていると2人の女の子達が寄つてき
た

水色の髪の子、緑の髪の子

?「おーい！そこで何してんだー?」

幻夢「ん？ああ、いや、余りにもデカかったもので、ブーツとして
た

?「そうですか、ここは色々と危ないので気をつけてくださいね?」

幻夢「え？あ、ああ、うん」

水色の子は、馴れ馴れしい感じで、緑の子は、とても礼儀正しい
ただ、危ないとは、どういう事だろう?

?「そういえば、自己紹介がまだでしたよね」

大妖精「私は、大妖精って言います」

チルノ「あたい、チルノ！」

幻夢「えっと、俺は幻夢だ、輝闇幻夢」

幻夢「ていうか、君達の背中にあるものって?」

大妖精「ああ、羽ですね」

幻夢「え？羽？」

色々ところんがらがつてきた

羽？ファンタジーじゃねーんだぞ？

一体何がどうなってるのやら……

チルノ「ねえ、おじさんどつからき来たの？」

幻夢「いや、おじさんじゃねーよ、もつと若いわ」

幻夢「何処から来たというか、そもそもここを知らないんだよな」

チル大「え？」

幻夢「え？なんか変なこと聞いた？」

なにやら、チルノと大妖精が、ヒソヒソと話し合っている

チルノ「よし！霊夢のとこ行こ！」

大妖精「ここがわからないなら、外来人の可能性がありますからね」

幻夢「外来人？は？」

結局、言われるがままに連れていかれた俺である

今、目の前には、結構な段数の階段があった

一番上が見えねーんだけど

大妖精「さあ、早く行きましようか」

幻夢「ちよつと待て！この段数をどうやって上がれと?！」

チルノ「どうやってって、飛べばいいじゃん、変なの」

幻夢「は？」

飛ぶという単語に混乱する俺

飛ぶとは一体どういうことだ？

大妖精「えつと、飛ぶイメージすれば飛べると思います、それでも

無理なら、歩きでいきましょう」

幻夢「いや、飛ぶイメージつつても……」

取り敢えず、自分が飛ぶイメージをする

すると、ふわふわと地面から足が離れていく

幻夢「おいおい、マジかよ……」

大妖精「ここには、飛べる人と飛べない人がいるんです」

チルノ「はーやーくー！おいてくよー！」

大妖精「待つてー！チルノちゃん！」

大妖精「貴方は飛べるみたいですけど、その反応は、初めてですね、早めに慣れてくださいね？」

幻夢「はあ……………」

慣れてと言われても、そう簡単には慣れないだろう
取り敢えずついていくことにした

目の前には、少し大きめのよく見る神社が

チルノ「おーい！れーいーむー！」

？「何よ、うるさいわねー」

大妖精「あ、霊夢さん、こんにちは」

霊夢「あー、大ちゃん達じゃない、こんにちは」

霊夢「で、そこにいる人は？」

幻夢「あ、えっと、幻夢っていいいます、輝闇幻夢」

霊夢「輝闇幻夢ね……………聞かない名前ね」

チルノ「あたい達そこらで遊んでるねー！」

大妖精「あ！待つてよチルノちゃん！」

霊夢「ええ、いつてらっしやい」

そう言うと、チルノと大妖精は飛んでいった

霊夢「また外来人か……………」

幻夢「また？俺の他にも、外来……………人？が？」

霊夢「そうね、貴方の他にも色んな人がここに来たわ」

霊夢「取り敢えず、ここの説明ね」

幻夢「お願いします」

霊夢は、ここについて話し始めた

霊夢「ここは幻想郷と言って……………」

【少女説明中】

霊夢「……………てな訳」

幻夢「成る程、そう言うことか」

霊夢 「あんたの妹についてだけど、あいつに聞いた方が早いわね」
幻夢 「あいつ？」

霊夢 「ええー案内するわ、ついて来て」

そう言くと、霊夢はすぐに空を飛んでいった

俺も、すぐにそのあとをついていった

自分の能力と屋敷

幻夢

霊夢「そうだ、貴方の『程度の能力』って何？」

幻夢「『程度の能力』？」

霊夢「あ、そっか、知らないんだっけ？」

そりやそうだ

さっきの説明には出てこなかったし

霊夢「一回降りましようか、調べるから」

幻夢「あ、はい！」

そう言つて、俺と霊夢は、地面に降りた

霊夢「じゃ、今から調べるから、じつとしてて」

幻夢「はい」

言われた通りじつとしている

数分くらいだろうか

調べ終わったらしい

霊夢「あんた、能力ありすぎよ」

幻夢「え？」

霊夢にそう言われ、どんな能力か聞くと

??????????
相手を浮かせ拘束する程度の能力
空を飛ぶ程度の能力

・ 身体を変化させ防御力を飛躍的に上げる程度の能力

・ 不完全な力を解放する程度の能力

・ 煙を操る程度の能力

・ ハザードレベルを上げる程度の能力

ゲームの力を扱う程度の能力

ゲームの力の源を出す程度の能力

????????????
こんなにあつた

ここまで来たら『程度』じゃ済まないと思う

幻夢「なんだよハザードレベルとかゲームとか」

霊夢「さあ？人それぞれだしね？」

霊夢「ただ、この中にいくつか、道具を使わないと使えない物があるのよね」

霊夢「その荷物の中に何か無い？」

幻夢「そうは言われても……」

霊夢に言われ、リュックの中を漁る

すると、紫色のゲームパッドの様なもの

A、Bボタンしか付いていない

どこか、ビームガンとチェーンソーを思わせる形

そして、赤い、少し小型の道具と、それにくっついているアダプターらしき物

赤い道具には、メーターと、カバーがあり、カバーの中には青いボタンが付いている

幻夢「なんだ？……これ？」

霊夢「恐らく、それね」

霊夢「取り敢えず、名前でもつけたら？」

幻夢「名前？……名前か……ん？」

名前を考えていると、ふと、頭に何かがよぎる

幻夢「こつちが、ガシヤコンバグバイザーで」

幻夢「こつちが、ハザードトリガー」

霊夢「へえ、いいセンスじゃない」

なぜこの名前が出たのかは知らない

取り敢えず、これにしておこう

一通り終わったので、再び目的地へと飛ぶ

着いたのは、とても大きい屋敷だった

霊夢は、そのまま門へと足を進める

しかし、門には、緑のチャイナ服を来た女性がいた
恐らく門番だろう

しかし、様子がおかしい

門番「……………」

幻夢「あれ？」

霊夢「そつとしておきなさい、寝てるだけだから」

幻夢「寝てる?!」

そんな人が門番で大丈夫かよ…………

あの後、霊夢がノックして、メイドと思われる人が出てきた

そのまま屋敷の中へ入っていった

入る前に、門番にナイフを投げつけていたことについては何も言わないでおこう

屋敷の中を歩いて行くと、あるドアの前で止まった

メイド「お嬢様ならこの先ですので」

霊夢「ありがとう、咲夜」

咲夜と呼ばれるメイドは、消える様にいなくなった
というか消えた

霊夢「さ、行きましょ」

幻夢「ああ、はい」

これについても驚かなくなった自分が怖い

お嬢様「よく来たわね」

霊夢「久しぶりね、レミリア」

レミリア「ええ、久しぶりね」

レミリア「貴方が来ることは、すでにわかっていたわ」

幻夢「え？」

霊夢「彼女はレミリア、この屋敷、紅魔館の主人よ」

霊夢「で、『運命を操る程度の能力』の持ち主よ」

幻夢「運命を……………」

使い方によれば、世界を滅ぼせそうだな

レミリア「それで、貴方の妹さんについてだけ……………」

霊夢「あ、私、もうめんどいんで帰るね」

幻夢「え？」

レミリア「フフツ、霊夢も相変わらずね」

霊夢「それじゃ、頑張つてねー」

そう言つて、霊夢は帰つていった

レミリア「話を戻すわね」

レミリア「貴方の妹さんについてだけど…… 教えるわけには行かないわね」

幻夢「え？何故？」

レミリア「そうねー…… 私の願いを聞いてくれれば、教えてあげましようか？」

幻夢「……… いいぜ」

レミリア「なら、願いはく……… 私の家族になりなさい！」

幻夢「……… へア??？」

いきなり何を言い出すか

家族？

俺にはエリナという妹がいるんだが？

レミリア「どうするの？」

幻夢「……… しようがない、わかった」

レミリア（やったー！）コゴエ

レミリア「さて、約束は約束よ、妹さんは」

レミリア「魔法の森にいるわ」

練習と再会

幻夢

幻夢「ま……魔法の森？」

レミリア「ええ、魔法の森よ」

魔法の森だ？

だとしたら、色々やばいよあいつ

下手したら暴走するぞ！

幻夢「なあ、あいつ、今暴れてたりしてないか？」

レミリア「そうね、暴れてはいないわね」

レミリア「何故そんな事を？」

幻夢「いや、エリナは、理解不能な事が嫌いだし、それに……」

レミリア「？」

これ、言っ正しいのか？

いや、言わない方がいいだろう

幻夢「いや、何でもない、暴れてなきやそれでいいや」

レミリア「フツツ、言う気は無いわね」

幻夢「あなたの能力とかで見りやいいじゃんか」

レミリア「そうね、気が向いたら調べましょうか」

幻夢「そうだ、今日から家族だつたけど、他の人にも挨拶しな

きやなんだが」

レミリア「あら、それなら1人、気が早い子がいるわよ？」

幻夢「は？」

気が早い？

何を言ってるんだ？

？「おにーちゃん！」

幻夢「えっ！ちょ!!ウエツプシ!!!」

どう言う状況だ？これ

振り向いたと思ったら誰かが飛びついてきた

お兄ちゃんって言ってたけど、そもそもエリナは、俺の事をお兄

ちゃんとは呼ばないし

幻夢「えつと……誰？後どいてくれるかな？」

？「あ、ごめーんね？フフツ」

この子たちは「フフツ」が口癖なのか？

フラン「私フラン！よろしくね！新しいお兄ちゃん！」

幻夢「ああ、俺は幻夢だ、よろしくな」

なんか……お兄ちゃんって言われるとなんか落ち着かねーな

レミリア「さあ、挨拶に行きましょ？」

【少年挨拶中】

幻夢「いや、紅魔館って広いな」

フラン「でしょ!?!とつても遊びがいがあるんだよ！」

レミリア「まあ、広くて困る事は移動が面倒なだけだからね？」

レミリア「そうだ、貴方の能力、使ったことある？」

幻夢「いや、まだだけど」

フラン「じゃあ、練習しよう！」

幻夢「練習？」

今、俺は紅魔館の屋上にいる

俺の能力のテストみたいなものだ

相手は、レミリアとフランがしてくれるそう

なにやら、ここ、幻想郷には、皆残機と言うものが存在するらしい

だから安心しろと

わかってても怖えな

そう

自分の能力には、名前があるらしい

まあ、いちいち言うのもアレなので、そこは察してほしい

まずは、戦闘用の能力からいいだろう

幻夢「まずは、『デビルトリガー』！」

レミフラ「キヤアアア！」

D Tを使用すると、レミリアとフラン宙に浮き、そのまま固まる
どうやら、相手を浮かせ、拘束するみたいだ

D T解除つと

幻夢「次は、『スチーム』！」

両手から、煙を出す

上限とかは無いのかな？

幻夢「これで、武器とか作んのか、剣とかは？」

剣を思うと、スチームでできた剣が出た

あとは実戦で試すか

幻夢「じゃ、これだな」

俺は、バグバイザーを、右手のアタッチメントパーツに取り付けた

『ガシヤコンバグバイザー』

『チュ・ドーン』

幻夢「チュドーン？」

すると、バグバイザーから、ビームが出た

フラン「なにそれすごい！」

レミリア「それが、貴方の弾幕ね」

幻夢「弾幕……」

多分、弾幕とかの次元じゃ無いと思う

ここで、一つ気になった事が

『プロトトリガー』『ハザードトリガー』『ガシヤットパワー』が使えないのだ

まあ、よくある、後から使える奴だろう

レミリア「さて、一度私の部屋に戻りましょう、貴方にいい事があるかもね？」

幻夢「いい事？なんだそれ？」

レミリア「フフツ」

なんだろう

なんか企んでる気がするんだけど

レミリアの部屋に着いた訳だが

幻夢「で？そのいい事って？」

レミリア「フツツ、すぐに来るわよ」
ガチャ

扉の開く音

レミリア「来たわね」

俺は、扉の方へ向くと

幻夢「あー！」

見慣れた『アイツ』がいた

く妹く

妹の目覚め

エリナ「ん？」

あれここはどこだ？

エリナ「……………」

エリナ「あ！」

兄の姿が見当たらない！

エリナ「……………」

荷物は無事だが兄の荷物兄の姿が見当たらない

エリナ「……………」
「とりあえず人を探そう」

にしてもここはわたしの嫌いなものばかりだ

キノコすごいあるしなんか意味不明だし

エリナ「非常食にはなるか？」

と一つのキノコを手にとると

??? 「あー！それは有名なコウウンダケだ！」

??? 「待ってよー！」

エリナ「は？」

??? 「お願いだ！そのキノコを譲ってくれ？」

??? 「ってお前誰だ？」

エリナ「……………」
「人に名前を聞くときは自分から名乗るでしょ」

??? 「そうだな！わたしは霧雨魔理沙！んでこっちはアリス」

アリス「フルネームはアリス・マーガトロイドよ」

エリナ「私は輝闇エリナ」

魔理沙「お前人間だろ？なんでここにいるんだ？」

エリナ「気づいたら」

アリス「もしかして外来人？」

はあーほんつとうに最悪意味不明すぎる

魔理沙「じゃあ霊夢の所行ってみるか？」

アリス「とりあえず付いて来て私の家でゆっくり話しましょう」

アリス「ここよ」

アリス「ちよつと待ってね 上海これ運んで」

??「シャンハイ」

エリナ「は？」

人形が 動いて る？

もうなんなんだよここ……

魔理沙「あ！そうそう、キノコなんだけどさ」

エリナ「あーもうあげますよ」

魔理沙「サンキュー！」

アリス「おまたせ」

アリス「えつとね、まず貴方の能力なんだけどね」

エリナ「能力？」

アリス「例えば…私は人形を操る程度の能力で」

エリナ「……………あーなるほど」

アリス「理解早いね…で！能力を調べるんだけど良い？」

エリナ「まあいいですけど」

自分の能力…か

アリス「じゃあまって…魔理沙も手伝うからね」

魔理沙「わかったからこつちみんな」

少女調べ中

アリス「えつと…できたよ？」

エリナ「結果は」

魔理沙「お前能力多すぎるだろ…」

アリス「ちなみに……」

- ・ありとあらゆる能力、攻撃をコピーする程度の能力
- ・ありとあらゆる武器を使いこなす程度の能力
- ・感情を力にする程度の能力
- ・二重人格の程度の能力

エリナ「……………えつと」

魔理沙「チートすぎるぞこれ…」

アリス「とりあえず…どうしようかな? コントロール出来るように練習する?」

魔理沙「……………!」

エリナ「?」

魔理沙「お前私と勝負だ!」

エリナ「は?」

アリス「は!?! ちよつと魔理沙!?!」

魔理沙「大丈夫だぜ!」

エリナ「……………」

これ…積んだ

魔理沙「行くぞ」

エリナ「いきなり?」

魔理沙「アリス、始めて!」

アリス「わかったけど怪我させたらゆるさないよ!」

エリナ「あ、あった」

チャキ

魔理沙「え? どっから出した」

エリナ「護身用に持ってただけ」

アリス「へー鎌かー」

アリス「いくよ よーい どん!」

魔理沙「いくぜ! スペルカード発動!」【スターダストレバリエ】

エリナ「とんだ!?!」

アリス「頑張つて!」

……………よし

エリナ「コピー」

エリナ「お?」

コピーと言うと私の体に力が入って来た

エリナ「よし！」

ビュン！

エリナ「と…ん…だ？」

魔理沙「よそ見はダメだぞ！」

エリナ「うわ！」

エリナ「ん？なんだこれ」

エリナ「えーとスペルカード発動【恋符マスタースパーク】

魔理沙「な！」

ドーン！

私の手から出たビームは魔理沙を巻き込んで地面に落ちた
続く

く兄妹く

兄との再会

エリナ「大丈夫？」

魔理沙「助かったく」

アリス「威力が弱かったからよかったみたい」

エリナ「ふう」

魔理沙「んーていうかとりあえず紅魔館行こうぜ」

エリナ「え、なんでいきなり」

魔理沙「あいつならお前をとめてくれるだろ」

アリス「私は行かないからね」

魔理沙「オツケ！ほらエリナ行くぞ！」

エリナ「えっちよつま」

ビューーン！

アリス「エリナ頑張って」

魔理沙「着いたぞ！」

うぷキツい

魔理沙「おいまた怒られるぞ」

魔理沙はもんのまえで寝ている人に話しかけていた

エリナ「すいませーん」

???「何かしら」

魔理沙「こいつをここにいられてくれ、あとめい…」

??「ねてないです！」

???「本当は？」

??「いい寝心地でした」

???「：魔理沙その子お嬢様の所に連れて行って」

魔理沙「ああ」

ブス
ブス

アギヤアー!

ここの世界のメイドさん恐ろしいな…

魔理沙「あつそうそうナイフ刺さってたのが紅美鈴

メイドが十

六夜咲夜」

エリナ「あうん」

魔理沙「ここだ」

エリナ「うん」

ガチャ

「来たわね」

「あー!」

エリナ「え」

なんか羽生えてるんだけど

幻夢「エリナ!」

エリナ「お!」

幻夢「暴れてないな!暴れてないよな!」

エリナ「その人に聞いて」

魔理沙「わたしは霧雨魔理沙!少しそいつと戦わさせてもらった」

幻夢「あ、そうか」

エリナ「ちなみにお前は?暴れてないよな?おまえ毎回怪我するんだから」

幻夢「……(目をそらす)」

ト
「ああそう自己紹介がまだだったわね 私はレミアアスカーレツ

ト
「でね!お姉ちゃん!私がフラン!フランドールスカーレツ

エリナ「お、お姉ちゃん?」

レミア「あとあなたも今日から家族よ」

エリナ「……え?」

レミア「住む場所ないでしょう?あなたの兄も良いらしいね」
エリナ「ジロリ」

幻夢「あ、いや、えっと」

エリナ「お兄ちゃんそういうのはね、早めに言うんだよ？携帯持たせてるでしょ？」

エリナ説教中

エリナ「わかった？」

幻夢「はい…」

フラン「ねえねえねえねえ！お姉ちゃん！いきなりだけどご飯作ろう！お兄ちゃんも！」

幻夢「えっと何作んの？」

フラン「これ！」

パラ

エリナ「サンドイッチとプリン？」

フラン「うん！作ってみんなで食べよう！」

エリナ「いいよ」

なんか話そらされた気がする

幻夢「俺は遠慮しとくわ作るのが」

フラン「えーなんで」

幻夢「……………（エリナ助けて）」

エリナ「…」

ごめん無理！

レミリア「いいのよフラン、エリナと作って来なさい、あまり困らせちゃダメよ？」

フラン「はーい」

続く

人里

幻夢

幻夢「そだ、エリナ！」

エリナ「なに？」

幻夢「さつき、携帯で連絡がうんたら言ってたじゃん？」

エリナ「うん、なに？まだ怒られ足りないの？」

幻夢「なんでそうなるんだよ、携帯見てみろ」

そう言うと、エリナは、携帯を確認した

幻夢「画面左上に注目してもらおう」

エリナ「左上？あ……」

幻夢「なんて書いてある？」

エリナ「……… 圏外」

そう！圏外！

幻夢「まあ、これはお互い知らなかったからいいだろ」

エリナ「そうだね、それじゃ、フランのそこ行ってくる」

幻夢「おう、いってらう」

……… なんてだ？

何故『プロトリガー』『ハザードトリガー』『ガシヤットパワー』が
使えないのか

よくある感情だろうか？そもそも資格がないのか？それは無いか

まあ、どうだっかっていいだろう

ちよつと散歩するか

人里の場所も聞いたし

幻夢「ちよつくら出かけってくるあー」

レミリア「はい、いってらっしやい」

さて、人里に来たはいいものの、どうするか

取り敢えず、飯だ

俺が紅魔館に来た時は、30分くらい前に昼飯は食ったって言って

だから

エリナは……後でフランと食うだろう

さして、なに食うかな？

……団子でいっか

いや、ここの団子美味かったな

今度エリナも連れてこよ

さして、後はどうすっか

里をほつつき回ってたら、もう夕方

そろそろ帰るか

幻夢「ただいまー」

エリナ「あ、おかえりー」

フラン「お帰り！お兄ちゃん！」

うん、やっぱ慣れない

そういえば、紅魔館に戻ってくる途中、何かの気配と視線を感じた

嫌な予感がする

こんな時の俺の感は、よく当たる

なにもなきやいいが……

次の日朝食を取って、外へ出かけた俺

せめて『ガシヤットパワー』くらいは使える様にはしたい

でも、どうすれば……

そう思った矢先、俺の左手に何かの機械が現れた

これが『ガシヤット』と呼ばれる物だろう

幻夢「あれ？なんで昨日は使えなかつたんだ？」

そんな疑問は置いときつつ『ガシヤットパワー』を試す
すると、

エリナ「何してんの？」

幻夢「オワツ?!なんだ、エリナか」

フラン「フランもいーるよ！」

幻夢「あれ？フラン、太陽大丈夫なのか？」

エリナ「なんかパチュリーさんに魔法かけて貰ってるみたい」

幻夢「あ、成る程」

フラン「今から人里行くんだけど、お兄ちゃんも行く？」

幻夢「折角だから行こうか」

てな訳で人里へGO！

人里には来たものの、人が誰一人としていない

どう言う事だ？

フラン「なんで誰もいないの？」

幻夢「なあ、エリナ」

エリナ「あんたもか」

ピンポイント
予感的中

戦闘&エリナ「あっそういえば」

エリナ「フラン、ここは明らかに何かいる、気をつけて」

フラン「うん、わかったよお姉ちゃん」

エリナ「あーそうそう幻夢なんか能力あるの？」

幻夢「あるよ？えっと」

少年説明中

幻夢「……………つてこと！」

エリナ「ふーんちなみに私は」

少女説明中

幻夢「お前も多いし」

フラン「ちなみに私はね！【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】なの！」

えっちよつま

まって意味不明すぎて

吐きそう

エリナ「うぷ！」

幻夢（エリナ！耐えろー！）

ガタゴト

幻夢「ん？」

???「うらめしやー！」

エリナ「……………」

幻夢「……………」

フラン（あーあ地雷踏んじやった）

???「あれ？」

幻夢・エリナ「血祭りに上げてやる」

???「わわ！えつとごめんなさい！」

エリナ「だいたい驚かせ方が下手！」

???「そ、そんな、あつ、アドバイスとかないんですか!?!」

エリナ「わかった教えて……………」

.....

??? 「えっどうしたんですか？」

幻夢 「名前は？」

小傘 「えっと多々良小傘です」

フラン 「どうしたの？」

フラン 「戦いよ！」

ガサ！

??? 「イー！」??? 「イー！」??? 「イー！」

??? 「イー！」

エリナ 「えっと全員合わせて約100人かな？」

幻夢 「100人か……」

フラン 「ほら！」

小傘 「えー！」

エリナ 「ほらいくぞ」

100ね…

そういえば感情で強さが変わるね

今意味不明すぎて、怒り99%くらいだから

いけるか？

幻夢 「いくぞ！」

エリナ 「私にやらせて……」

小傘 （一応人里に結界を張っておこう）

エリナ 「……」

ゴゴゴゴゴゴ

幻夢 「やばくね！これ！」

フラン 「お姉ちゃん相当怒り溜まってたんだね！」

幻夢 「あっ（納得）」

幻夢 「てかどーすんだよ！」

小傘 「大丈夫！結界張ったから！」

エリナ 「スペルカード発動！【サンダーストーム】

ガミガミドカン！

エリナ 「ふー」

幻夢「えつと……落ち着いた？」

エリナ「バツチリ」

小傘「じゃあ結界ときますね！」

小傘「それでアドバイスを」

エリナ「いいよ、フランと幻夢はこれを買に行つて、後から行くよ」

幻夢「ああ」

フラン「うん！」

エリナ「んでな」

少女説明中

エリナ「見本は」

エリナ「ゴバツウアアア」

小傘「ガタガタガタ」

エリナ「これで良い？」

小傘「はい、お礼にこのナイフをあげます！」

エリナ「ありがとう」

幻夢「おつ来たか」

フラン「ちゃんと買ったよ！」

エリナ「ちなみに今日のご飯は？」

フラン「咲夜がつくるよ！」

咲夜？ああナイフの人か

え？大丈夫かな

美鈴「お帰りなさい！」

エリナ「あつ起きてた」

幻夢「……ナイフが」

エリナ「気にしないでおくよ……」

エリナ「あつそういえば」

幻夢「どうした？」

ガサゴソガサゴソ

エリナ「あったあった、小型WiFi」

幻夢「おっ」

エリナ「もういとおあるからはい、これのできるでしょ？」

幻夢「てゆうーかお前が来た時なんでWiFiなかったんだ？」

エリナ「これ電源付き」

幻夢「あーそういう」

咲夜「ご飯ができたわよ」

続く

ガシヤットパワーと更なる出会い

幻夢

つい先日、「イーッ！」という変わった鳴き声をした生き物を発見した

見た目は、全身黒タイツに、骨の絵柄があり

覆面は、目と口に穴が開いている、完全なる変態犯罪臭がプンプンする奴だった

どう調理したかは、前回を見てくれればわかるだろう

面倒な方の為に教えよう

怒り99%のウルボ…………… エリナサンダーで一発

チリ一つ残さなかった

…………… スペルカードねえ……………

俺はいらないかな？

今、気分転換に森に来ています！

魔法の森では無い、別の森やで

喋り方が時々変になるが、気にしないで頂きたい

これが、リアルで普通なのだから（わりかしマジ）

森を歩いていると、結構ひらけた場所があった

ここで、能力のテストでもしようかな？

幻夢「よし、ガシヤットパワーを試すかな？ 『マイテイ』！」

そういうと、紫色のガシヤットが出てきた

そのガシヤットのスイッチを入れ、起動

『マイティアクションX！』

幻夢「装着！」

『ガシヤット！』

幻夢「…………… で、この後どうすんだ？」

誰か説明書持ってないか？

使い方がわからん！

ん？

なにやら赤いスイッチ

幻夢「気になるものがあれば押す！それが人間！」
ポチツとな

『バグルアアップ！』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティくアクションX
！』

……………

何か変化したか？

そう思い、一度上空に打ち上げる

すると、ビームが、トリッキーな動きをしていく

幻夢「………… おもしろいな、これ」

幻夢「次は、『激突』！」

『ゲキトツロボッツ！』

ここからしばらくは、セリフ、音声のみで楽しんでもらおう

『ぶっ叩けく突撃猛烈パンチくゲ・キ・ト・ツロボッツ！』

幻夢「これは………… おっとと」

幻夢「なに？アーム？」

幻夢「次！『ドレミファ』！」

『ドレミファビート！』

『ド・ド・ド・ドシラソファミレド・OKドレミファビート・』

幻夢「これは………… 音符爆弾か、似合わねーなー、音楽に爆弾って」

後は、後書きにまとめておくよ

幻夢「今日はこれくらいでいっか」

？「あの……………」

幻夢「ん？」

振り返ると、ピンクの髪色をした女の子がいた

それに、お面を被っている

幻夢「どうした？」

？「いや、さつきからずっと見てて……………」

幻夢「え？」

？「その、かつこいいなって……」

幻夢「かつこいい……」

「……」

幻夢「ああ、俺は幻夢だ、よろしく」

「……」

至って普通そうだが

物静かだな

幻夢「それじゃあ！」

「……」

「……」

まあ、悪い気はしないな

さして、帰るか

人里で……

先日くらいに「イー！」と言った変出者がいた

まあ怒りで我を忘れていたからほとんどはわからないけれど
サンダーストーム？というスペルカードを使ってたみたい

うまくコントロール出来るようにしたいな

ちなみに私は人里にいる

まあ知らないこと多いからね

??? 「あやや！いましたね！」

エリナ「は？」

射命丸「申し遅れました！私は天狗で新聞記者の射命丸文です」

エリナ「新聞記者……」

聞いたらわかるめんどくさいやつやん

文「というところで 要件はあなたのことを新聞にさせていただきます
ました」

エリナ「ああそう、………は？」

いただきました？ いただきますじゃなくて？

ん？これ、もう書かれたのか？

まだまにあうか？

エリナ「ちなみに出版は？」

文「しましたよ？」

魔理沙「おーいエリナ！お前新聞に載っているけど!？」

エリナ「見せて！」

輝闇エリナという少女が村の変種者を倒したのだ。

そして彼女にはあらゆる能力がある。それは明日の夕刊に出す。

ちなみに兄がいるらしい。

エリナ「……」（プルプル）

魔理沙「え、エリナ？」

文「それで能力と住んでいる場所を聞きに来ました」

エリナ「文さん」

文「はい？」

エリナ「ふっぎけんなよ！ゴラア！」怒り100000%
文「え？」

フラン「あれ？お姉ちゃん」

幻夢「うわ！エリナ落ち着け！」

レミリア「ああ大丈夫そうよ」

幻夢「いやこちら辺吹き飛ばぞ！」

レミリア「大丈夫 万が一何かあっても咲夜がいるから、その間に
買い物を楽しみましょう」

エリナ「いっちょよやってやら！」

エリナ「激おこ説教&論破中」

エリナ「わかったかゴラア」

文「……はい」（チーン）

???「すみません！文さんが」

文「も、もみじく」

樵「ちなみに私は犬走樵です」

文「助けてく」

もみじ「そもそも文さんは新聞記者として失格です！」

エリナ「あととはよろしく」

もみじ「はい、ご迷惑をかけてごめんなさい」

エリナ「よし帰ろう」

幻夢（エリナサンダーよりもやばそうだな……）

??「すみません！」

エリナ「はい？」

???「エリナさんあなた私についてきてくれないかしら」

エリナ「え？」

??「申し遅れました。私、東風谷早苗です」

エリナ「は？」

早苗「ほら、とりあえず来てください！」

エリナ「ここは？」

早苗「妖怪の山の守矢神社ですね」

エリナ「そう、それはいいけどさ、なんで幻夢とフランとレミリアも来てるの？」

幻夢・フラン・レミリア「なんとなく」

エリナ「あ、そう、でなに？」

早苗「貴方の力を見せてください。」

エリナ「えっでも」

人里が结界張つてもあと一步で壊れそうだったんだぞ？

早苗「大丈夫です！霊夢さんにも手伝ってもらいましたから」

エリナ「霊夢？」

幻夢「あー明日連れて行くよ」

早苗「はいそれでは妹紅さーん」

??「なんだよ」

エリナ・幻夢「うわ！」

早苗「さつき話しましたよね？」

妹紅「あー、ちなみに私は妹紅だ。ほら、エリナ技をなんかやって
みる、大丈夫だ私は不死身だ」

エリナ「わかったえつと【サンダーストーム】」

妹紅「ギャー！」ピチュン

フラン「あっピチュツた」

エリナ「あれ。今怒り0.003%なんだけど」

幻夢「あれじゃね？使うたびに強くなる的な」

レミリア「そうねえ。前の威力は100だけど今は500みたいな
かんじね」

エリナ「え」

妹紅「いててて。で次は？」

エリナ「えつと【スペルカード発動 エレメンタルキルト】」

……

エリナ「あれ？」

妹紅「あれだな、怒り？使い切ったな」

エリナ「じゃ帰っていい？」

早苗「うーんもつと見たかったけどいいでしょう。」

エリナ「よし帰ろう」

妹紅「ん？」

チャリン

妹紅「あーなるほどさっきのスペカ地雷みたいなものか」

妹紅「……………ギヤー！」

エリナ「ふう、疲れた」

咲夜「ご飯よ」

エリナ「わかった」

エリナ「今日はステーキ？」

幻夢「…」（ガツガツムシヤムシヤ）

フラン「お兄ちゃんすごい勢いだね」

エリナ「多分それだけおいしいんだね」

続く

新・武装

幻夢

俺は今、紅魔館の敷地内の、ある場所に来ている
荷処かつて？

まあ、まずはこれをご覧頂きたい

幻夢「なあ咲夜？、今何処に向かつてんだ？」

咲夜「秘密です」

エリナ「さつきからそればかりだよね？」

今、俺たちは咲夜さんに呼ばれて、ある場所に向かっている
目的地は知らない

歩く事数分

その目的地に到着した

そこで見たものは、意外なものだった

幻夢「おい……」

エリナ「コレって……」

咲夜「あなた方を此処へ連れて行きたかったのです」

遠くには的が数個あり、的から結構離れた場所に、木でできた何か
がある

う、俺たちが来た場所は……

出り幻「射撃場!？」

咲夜「はい、紅魔館に、こちらの荷物が届きましたので、それに似
合った練習場を」

咲夜「こちらがその荷物です」

そう言って差し出されたのは、黒い革が貼ってある大きな箱が二つ
片方は、もう片方に比べて少し小柄だ

箱の上部には、『Gemmu』と『Erina』と書かれていた

エリナ「私、先開けるね？」

まず、エリナが先に開ける

そこには、拳銃と折り畳み式の鎌

エリナ「コレって……」

拳銃と鎌の他に、紙が一枚入っていた

〔拳銃・大鎌〕

エリナ「なにこれ……」

幻夢「試しに撃ってみたら？」

エリナ「そうだね」

そう言つてエリナは、木でできた射撃台に立ち、的に向かって拳銃を撃つ

幻夢「そうだ、送り主は？」

咲夜「それがわからないのです」

幻夢「そっか、わからないのか」

何故、送り主は俺たちにはこんな物をよこしたのか

しばらくすると、エリナが試し撃ちを終えて来た

エリナ「結構使い勝手がいいよ、これ」

幻夢「そっか、じゃ、次俺だな」

そう言つて、『Genmu』の箱を開ける

そこには、途轍も無い大きさの剣と、銃先が長い銃、小さいレバーと歯車がついた黒い物体

幻夢「んだ？これ？」

一緒に入っていた紙を確認する

〔サムライエッジ アルバート Wモデル 01・高周波剣／レッド
クイーン・ハザードトリガー専用アダプター〕

〔サムライエッジのマガジンは、君のスチームでも代用出来る、むしろそっちの方が威力が良い〕

〔注意、ハザードトリガーを無闇に使うな、使い方を間違えれば、全てを破壊する〕

ハザードトリガーってそんなに危ないのか

まっ、名前からしてそうだよな
へハザードトリガー危険な引き金だもん

まあ、取り敢えず試し撃ちだ
サムライエッジにマガジンを差し込み、スライドを一回引く
そして、狙いを定めて撃つ

全体的の中心近くに当たった

幻夢「こりやいいな！」

俺たちに、新しい武器が誕生した

フランとの遊び

私は新たな武器を手に入れた。

そして明日は兄と一緒に霊夢？という人のところに行くから結構早めに寝たかったんだけど……

エリナ「フラン、どうして私の部屋に？」

フラン「ちよっとお姉ちゃんと遊びたくて！」

うーん今は6時、まあ早すぎたかな、いいか

エリナ「いいけどさ、何するの」

フラン「パチエがね、新しい結界の実験として弾幕ごっこをして欲しいんだよね。」

エリナ「弾幕ごっこ？」

フラン「ほら、守矢神社でスペカ使ってたでしょ」

エリナ「あー」

フラン「ほら、早く早く！」

エリナ「ちよ、ちよっとま……」

エリナ「ギャー！」

幻夢「あ？」

レミリア「何あれ、フランがエリナを引きずってる」

幻夢「そういえば前魔理沙とかいう人にもやられてた気がする」

レミリア「あちやー」

幻夢「ガンバ、エリナ」

レミリア「ところで明日お茶会に参加する？」

幻夢「悪いが明日エリナと一緒に霊夢のところに行くから」

レミリア「そう、じゃあ帰ったらやりましょう」

幻夢「そうだな」

エリナ「ゼーはーゼーはー」

フラン「パチエ！きたよ！」

パチユリー「おつきたわね、とりあえずエリナほら紅茶」

エリナ「う、うんありがとうパチユリー」

パチュリィ「とりあえず始めるよ！」

エリナ「その前に、はい、借りてた本」

パチュリィ「ああ【幻想郷の歴史第3969号】？これ100000
0ページあるのによく読めたね」

エリナ「結構早めに終わった」

フラン「まだ？」

エリナ「あーごめん」

パチュリィ「それでは、魔方陣大結界レベル1」

エリナ「おっできた」

フラン「油断は禁物だよ！【スターボウブレーク】」

エリナ「うわわ！」

トーカーン

エリナ「え？」

ポヨーン

これなんか結界に当たったら跳ね返ってきたんだけど！

エリナ「くそ！【コピー対象・フランドール・スカーレット&レミ

リア・スカーレット】」

エリナ「スペルカード発動【スカーレットシユート】」

パチュリィ「これは、レミイの技!？」

フラン「あっはっは！「克蘭ベリートラップ」

エリナ「やばいやばい！」

エリナ「あれ？」

なんでだ。なんでまだ魔理沙の能力があるんだ？

！それなら！

エリナ「スペルカード発動【ミルキーウェイ】」

フラン「えっ」

ドカーン！

小悪魔「あれは魔理沙さんの！」

フラン「……あはは……あっはっは！面白くなってきたじゃん！」

フラン「スペルカード発動【フォーブアカインド】」

エリナ「っ!?!」

パチュリー「魔方陣大結界レベル3!」

エリナ「フラ、んが4、人」

フランA「あっはっは!」

フランB「いい?」

フランC「覚悟は」

フランD「いくよ?」

フランA・B・C・D「禁じられ……」

エリナ「……」

イカリ

ポイント

1000000000000%

エリナ「スペルカード…発動〔ヘル・ズ・ゲート〕」

意味は

じごくのもん

フラン「えっ!ギャー!」(ピチュン)

エリナ「ふう、いてて!」

小悪魔「あ手当てしますから動かないで!」

エリナ「ごめんね、大丈夫?フラン」

フラン「いいのいいの!楽しかったし」

エリナ「そう、寝ていい?」

フラン「うん、バイバイお姉ちゃん、また遊ぼ!」

遊ぼてまた戦うのは流石にやだな

明日霊夢さんの所に行くから早く寝よう

zz

新・仲……間？と……カード

幻夢

幻夢「いや、ここに来るのも久しぶりだな」

エリナ「へ、ここが博麗神社か」

俺たち二人は、博麗神社に来ていた

俺は2回目、エリナは初めてだった

幻夢「いや、相変わらず」

エリナ「ねえ、」

エリ幻「階段なげえなく」

驚くエリナと懐かしく思う俺であった

俺たちは、空を飛んで、神社まで来た

幻夢「ヤッホー、来たでー？」

霊夢「あ、いやつしやい」

魔理沙「おー！エリナじゃねーか！」

エリナ「あ！魔理沙！」

こころ「あ、幻夢さん」

幻夢「お！こころじゃねーか」

なんか色々集まっていた

霊夢「で？何の用？」

幻夢「ああ、エリナを紹介したくてな」

エリナ「どうも、エリナです」

霊夢「貴方が魔理沙の言っていた子ね？」

しばらくは、エリナの自己紹介と、霊夢の質問に答えていた

こころ「そうだ、幻夢さんにお渡ししたい物が」

幻夢「ん？」

魔理沙「ああ、私もエリナに渡す物があったな」

エリナ「？」

俺たちに渡す物？

なんか昨日みたいなの奴じゃないよな？

こ魔「これですけど（ほれ）」

エリ幻「「んんんんん？」」

二つのダンボールを渡された

なんだこれ？（あーっちから見るとっ、回して見るとっ、こーんな

かったっちー デッデッデン！）

おまけになんか幻聴が聞こえた

耳の老化が進んどるんかな？（割とマジで思ってますww）

幻聴「とりあえず開けるか」

エリナ「そうだね」

俺たちは、一斉にダンボールを開ける

中に入っていたのは、箱

俺の方には、『GOURAI』

エリナの方には『STYLET』と書かれていた

エリ幻「「なんだこれ？」」

その箱を開けると、中には、少女の人形が入っていた

エリナ「え？」

幻夢「はい？」

エリナ「訳がわからない」プルプル

幻夢「落ち着こうか、な？」

とりあえず、少女人形を、エリナと調べる

特に、変わった所は無く、普通の人形だった

その時、エリナが、胸部分のスイッチに気づいた

俺は、少しのためらいがあったが、仕方なく押す

そこで、俺は、目を見開いた

轟雷「私は轟雷、たった今、起動を確認しました」

ステイレット「私はステイレット、今、起動を確認したわ」

そう、人形が動いたのである

霊魔幻工こ「「ええええええええええええええええええ?!」」

ちよつと飛んで、今、俺とエリナは、プラモデルを作っている

轟雷たちの武装やアーマーだ

轟雷たちの指示を受けながらも、なんとか完成

幻夢「どうだ？」

轟雷「悪くありません」

エリナ「そっちは？」

ステイレット「こつちも大丈夫よ」

「こころ」「とりあえず、今日はもう遅いので、明日調べませんか？」
皆、こころに賛成し、その場で解散した

帰り道、俺は、ある物を見つけた

二枚のカードだ

片面は、顔が描かれており、半分黒で、半分白い

もう片面は、何も描かれていない

幻夢「なんだ？これ？」

轟雷「どうしましたか？マスター？」

幻夢「いや、なんでもねえ」

エリナは、離れた俺に気づいていない

そのまま、エリナの元に戻っていく

今日は、分からない物だらけだ

あいつ、暴走しなきゃいいけど

エリナ「今日、イライラしたからのになれ」
幻夢「やっぱりく……く……」

異変

エリナ「おーい、霊夢さーん」

私は昨日お世話になった霊夢さんの所に手作りのお菓子を持って行ってあげた

兄はレミアさんとチェスをやっているみたい

霊夢「あらエリナ、その手に持っているのは……………お菓子?」

エリナ「はい、昨日お世話になったので」

ステイレット「はい、私が一緒にね」

霊夢「ジュルリ」

エリナ「はいどうぞ」

霊夢「ありがとう…本当にありがとう (泣)」

エリナ「あっはい」

ステイレット「召し上がれ」

霊夢「いっただけ」

魔理沙「霊夢! 霊夢! 異変だ異変!」

エリナ「え、い、異変?」

霊夢「魔理沙、お菓子食べ終わってからじゃダメ?」

魔理沙「ダメだよ、このままじゃ賽銭」

エリナ「腐ってもまた作るから…」

霊夢「うーわかったお礼に異変解決やってみる? あなたの力なら十分勝てると思うけれど」

エリナ「そうですね…やってみたいです。あと」

プルルルル プルルルル

エリナ「もしもし? 幻夢?」

《幻夢「なに?」》

エリナ「なんか、異変解決? って言うのに私行くんだけど行く?」

《幻夢「うーん、行ってみる、どこ?」》

エリナ「博麗神社」

《わかった》

魔理沙「霊夢、異変解決ってそんなに簡単にやらせるものなのか?」

霊夢「残機一個ずつ渡しとけば大丈夫でしょ」

魔理沙「おっおう」

魔理沙（て、適当…）

エリナ「来るみたいです」

【幻夢視点】

幻夢「なんかこうポンポンと神社に来るとか……………ん？」

轟雷「ゲンム！前方左側に謎の生命体が！」

???「ウエエアアアアアアアア！」

幻夢「はあ……………悪いちよつと遅れる」

俺はボイスで言葉を送りバグバイザーをチェインソーモードにして『シヤカリキスポーツ』を差し込んだ

幻夢「何処の誰かさんは知らねえけど明らかに敵対してるのはわかった」

ガシャット！

幻夢「その顔に車輪跡つけてやるよ！」

???「ウガアアア!!」

轟雷「ゲンム、その決め台詞ダサイと思います」

【エリナ視点】

異変解決かあ、どんな感じだろう。

でも、今イラついてないしなあ

パチュリーさんに頼んでみようかな

エリナ「……………（スマホ）」

数分後

幻夢「わりい、ちよつとトラブルあつて……………な？」

エリナ「おお、来たか」

轟雷「エリナ、その髪飾りは？」

私が付けていたのは虹色のとがった髪飾りだった

エリナ「いやーパチュリーさんに頼んだんだスマホで」

幻夢「えっ、パチユリー持ってるの？」

エリナ「子供携帯をね」

幻夢「え、子供携帯あんの？」

エリナ「終わったら聞けば？」

霊夢「準備はいい？行くわよ」

全員「OK」

霊夢「あと、ほれ、残機」

エリナ「え、なんですかそれ」

七海千秋「ゲームの残機」

霊夢「そゆこと」

エリナ「なるほど……？」

今幻覚見た、いや聞いた気がするんだけど

………

あとで考えよう

異変目的地

幻夢

エリナ「で、なんの異変なの？見た感じ変わったところはなさそうだし」

ステイレット「異変なんて無いんじゃないの？」

確かに、ここに来た時、霊夢にこれまでの異変をざっくり、ホントザツクリ聞いたけど

赤い霧……間違った、紅い霧もなし、冬が終わらないもなし、てか今春終了ちよつと前だし

何か異変と呼ばれるものはなかった気が……

霊夢「ステイレットの言う通りよ、異変なんてないんじゃない？」

魔理沙「異変はある！あつたんだぜ！」

魔理沙がここまで必死だとなあく……ん？

幻夢「なあ、異変かどうかは知らねえけど、一つだけ」

霊夢「何よ？」

轟雷「博麗神社に来る途中、謎の生命体と戦闘になりました」

魔理沙「見た目はどんなだったんだぜ?!」

幻夢「えつと……頭が半分に割れてて、割れ目は……なんだろ、マグマみたいになってた」

轟雷「剣を武装していて、防具も着ていました」

轟雷「人の形をしていましたが、肌は黒く、とても人とは思えない

姿でした」

轟雷の言う通りだ

車輪跡つけたら、死体は跡形も無く消えたんだがな

アトレウス「ドラウグルだ！」

クレイトス「待て！早まるな！」

……やべえ、俺も幻覚見えた

魔理沙「あれ？でも私が見たのは、凄く大きくて、耳から角みたいなのが生えてて、石柱みたいな抱えてたぜ？」

魔理沙「あー、でもそれっぽい奴も群がってたな」

霊夢「え？何巨人？」

幻夢「いよいよ分からなくなってきた……」

ステイレット「でも、そいつが危ないのなら、潰しに行った方がいいわね」

轟雷「確かにそうですが、ステイレット、私たち、役に立つのでしようか？」

ステイレット「知らないわよ！」

エリナ「はいはい喧嘩しない」

幻夢「で、その巨人見た所ってどこ？」

魔理沙「ああ、地霊殿の入り口近くで見ただぜ」

幻轟エス「地霊殿？」

霊夢「ああ、あなた達はまだ知らなかったわね、行けば分かるわ」
地霊殿？地面に関する霊の殿様？

【少年少女人形移動中】

霊夢「さあ、見えてきたわよ」

きつとそこが目的地であろう場所が見えてきた

ステイレット「え？途轍もない大きさの穴以外は何もないわよ？」

エリナ「まさか、あれが、地霊殿……？」

魔理沙「あれは地底に続く道だぜ」

轟雷「しかし、魔理沙が言ってた巨人は確認できません」

幻夢「まさか、あの中に入ったのか？」

霊夢「ちよつと聞いてみましようか、今のうちに準備しておいてね」

幻轟エス「「了解！」」」

俺は、轟雷の装備をつけながら、使用するガシヤットを選んでいた
幻夢「相手は巨人に、俺が倒した奴がいるから……」

轟雷「幻夢、ガシヤットを自由に出来るなら迷わなくても??次ここ
をお願いします」

幻夢「ああ、わかった、いや、ガシヤットを出すときのタイムラグに攻撃を受けるかもだし、止まってなきや出せないし、事前に出したいほうがいいんだよ」

轟雷「なるほど、次ここをお願いします」

幻夢「おけ」

エリナも、ステイレットの武装をつけ、拳銃に弾丸を込め、弾数確認もした

エリナ「96……97……98……98発か」

ステイレット「足りる？私のようなビームガンでもよかつたんじゃない？」

エリナ「スペカがあるし、パチュリーさんに貰ったこれもあるから」

ステイレット「それ、なんて名前なの？」

エリナ「そうだね……… 幻夢！」

幻夢「なんや！」

エリナ「髪飾りの名前考えて！」

幻夢『Anger control』で」

エリナ「なんで？」

幻夢『『怒り』を『コントロール』するを簡単な英語にした』

エリナ「ありがと！……… だつてさ」

ステイレット「いい名前じゃない」

霊夢と魔理沙は、地底の入り口付近に何かないか探している

魔理沙「霊夢く、なんかあったかく？」

霊夢「いえ、何も、そつちは？」

魔理沙「こつちもなかつたぜ」

霊夢「そう、それじゃあ周りは安全ね」

霊夢達が戻ってきたときには、俺らは準備を終えていた

エリナは拳銃を、俺は、ガシヤットを専用ホルスターに、ほぼ同時に入れる

霊夢「みんな、準備はできたわね？」

魔理沙「それじゃあ、異変討伐へ、GO！イエイ！」

エリナ（なんで異変討伐でテンション上がるの……？）

地底の住人

〈地底〉

全員「…」

うん

今ね、まだね、地底の穴の前にいるんだ
前回の流れだったらさ

もう入つてると思うんだ

だけどね？

飛べばいいだけなんだけどね？

幻夢・エリナ（こえええ！）

霊夢達はなんか知らへんけどなんかあつたのかな？

魔理沙「おい…いい加減に行かないか？」

エリナ「おっおう」

霊夢「よし」

霊夢「落ちるか…」

エリナ「…」

魔理沙「あーもう！」

魔理沙「みんな押すからな！」

幻夢「ちよ、ちよ、ちよとまつ」

ドン

ドン

「あぎちゃちゃちゃちゃちゃちゃ
魔理沙「さてと私も」
!!!!!!!
ピヨン

エリナ「はあはあはあ」

幻夢「生きてる、生きてるう！」

霊夢「大げさね」

魔理沙「よ！」

エリナ「おっ来た」

幻夢「あつちちゃんと来てた」

魔理沙「うん、なんかイラつく気がするけどいいか」

霊夢「さてと、ここに来たら最初にあいつに会うはずだけど」

???「わったしのこつとかなあ〜♪」

幻夢「うおう!!!」

???「あー、そのお兄さんとお嬢さん、はじめまして!」

ヤマメ「黒谷ヤマメだよー♪よろしく♪」

エリナ「よつよろしく」

エリナ「えつと私は」

幻夢「あーエリナいいよ」

そう言つて幻夢は煙を出して名刺?らしいものを作り

ヤマメに渡した

一応能力とかも書いて:いや、掘ってるのか?

ヤマメ「へー五代つていうんだね」

幻エリ「へ?」

幻夢「ちよつと貸して!」

よく見ると、左右に『夢を追う者』『1999の技を持つ者』

そして、その真ん中には『五代雄介』と書かれていた

エリナ「ジロリ」

幻夢「あーこつちだこつち!」

霊夢・魔理沙・エリナ「ジロリ」

幻夢「:」

そう言つて間違えた名刺を消して(?)

正しい名刺を渡す

ヤマメ「へー人間さんなのに強いねー!」

ヤマメ「そんで能力チートだね」

エリナ「あはは:」

ヤマメ「ちなみに私は土蜘蛛ね!」

幻夢「え」

エリナ「あ、だからか」

幻夢「:(虫無理虫無理虫無理虫無理虫無理虫無理)」

魔理沙「幻夢?」

エリナ「そつとしておいてあげて」

幻夢「よつヨヨヨ、よくむつ虫がきつ嫌いじゃないな！」

エリナ「別に」

魔理沙「よく見るし」

霊夢「美味しいし」

幻夢「ええ…」

ヤマメ「まあ無理もないよ！」

？

さらつと恐ろしい事聞こえた

最近どしたんだろ

幻覚だよな？

ヤマメ「んで、異変解決に来たの？」

エリナ「うん」

ヤマメ「助かるよ♪変なバケモンがいるってパルパルが言ってた

んだー」

幻夢「パルパル？」

ヤマメ「そのうち会うよー」

霊夢「あいつか…」

ヤマメ「まあ頑張つて！バイバーイ」

エリナ「さよならー」

??? 「パルパル…あのチート兄弟面白そうねパルパル」

続く

第2住人

轟雷「ゲムムは虫が嫌いなんですわね」

幻夢「ああ、虫だけじゃ無いぜ、マジで無理」

幻夢「霊夢はなんとも無いだろうがよ、動画のサムネで2・3回蝉食ってるって見たんだけどぜ！それで平気でいるとか無理があるすぎる！ふざけんよ！なんで蝉食ってるんだよ！そういうの動画出すなやな！あとスパイダーとかGとかブンカナとか！あと婆ちゃん所の家トカゲいすぎんだよ！なんだよ！広いうえにトカゲ大量発生だよ！マジ虫無理マジ虫無理虫無理虫無理虫無理虫無理！」

エリナ「ひ…… 久しぶりに聞いた……」

轟雷「何回も聞いてるんですか……」

ステイレット「どれだけ嫌いなものよ」

魔理沙「そ…… それほど嫌いだったのか……」

霊夢「なんか一周回ってかわいそうになって来たわ…… 食べた事は？」

幻「無い」

霊夢「やっぱり、でも美味しいわよ？」

幻夢「イヤだ！」

魔理沙「何というか……」

轟ス霊魔エ「」「」「ドンマイ」「」

幻夢「ウワアアアアアアアアアア!!」

半端思考停止になっている俺

そこにお構いなく話しかけてくる女性

???「パルパル…… さつきから聞いていれば虫虫って…… 妬ましいわね」

幻夢「ツ?!」

話しかけられた途端、エリナを盾にするように隠れた

魔理沙「それでも男かよ……」

???「パルシィよ…… なに？そんなに私に近づきたくない？妬ましいわね！」

幻夢「いやそんなんじゃない…… お礼s…… 虫じゃねえよな？」
パルシイ「違うわよ！橋姫よ！妬ましいわね！」
幻夢「そうなのか？それならすまなかった」
エリナの後ろから出てきて、警戒を解く
エリナ「それで、パルシイ…… だっけ？」
轟雷「この辺りで妖怪のようなものを見ませんでしたか？」
パルシイ「それなら地下深くへと潜っていったわよ、被害がなければ良いのだけれど……」
霊夢「ありがとう、さあ、行きましょう」
魔理沙「さっさと異変解決だぜー！」
そう言つて更に奥へと潜つていった
パルシイ「…… 私の出番これで終わり？」
パルシイ「……」

妬ましいわね!!

そんなこんなで穴の最深部までたどり着いたのだが
エリナ「…… なんか、血生臭い」
幻夢「え？（クンクン）…… 本当だ」
霊夢「ああ、気にしないで、此処にいるのが死体集めてる人だから」
幻エリ「…… はい?!」
死体コレクション?!
どういう趣味だよ！
?? 『やくお』

第3住人

幻夢「ん?」

エリナ「どうしたー?」

幻夢「今、猫の鳴き声がした気がする」

エリナ「…」

魔理沙「どういうことだぜ?」

エリナ「動物も嫌いみたいなんだ。見るのはいいけど触るとかは無理らしい」

霊夢「大丈夫でしょ、人間ぼいし」
?

まさか…人面犬ならぬ人面猫!?

ちなみに幻夢は?…

幻夢「まあそれならいいや」

いいのかよ!

「にゃーお」

エリナ「近くなった!」

???「何?さつきから私の話をしてさ!」

エリナ「……………」

あれ

あつれれー?おかしいぞー?

人面猫じゃねえ…

むしろコスプレだろ…

魔理沙「なあなあ!ここら辺で化け物いなかっただか?」

???「いたよー、だけど、こいし様が地霊殿に持ち帰ってたよー?」

全員「…はあああああああああああ」

幻夢「まじかよおい!?!」

エリナ「てか止めろよ!」

!!!!!!!!!!

???「別に日常茶飯事ですしー」

霊夢「いやいやいや化け物ってわかるでしょ!」

???「まあまあてかそこのお二方誰?」

エリナ「ああえつと」

少女説明…

???「なるほど…ちなみに私はお燐つてよんでね！」

エリナ「そうか…:…!」

幻夢「どうしたー？」

エリナ「なっなんでもない」

お燐さん

すー…つごく

血生臭えええ

!!!!!!!

死体集めすぎだろ！ファ、ファブオーズがほしい！

てか霊夢さんと魔理沙さんはわかる！

ついでに轟雷とステイレットも！

なのに！幻夢なんで大丈夫なんだよ!!!!

おかしい！

お燐「てか幻夢さん意識保ってます？顔青ざめてますよ？」

幻夢「

うお！だつ大丈夫

だった」

霊夢「あれよあんた血生ぐさいのよ」

言った！チョーードストレットに言ったー…!

ステイレット「よかったわ。言ってくれて」

轟雷「実は私も」

幻夢「エリナ、ファブオーズある？」

エリナ「えつと」

《カバンの中にあるもの》

- ・リップ
- ・ハンドジェル
- ・お菓子
- ・香水
- ・武器

…あれ入れたっけこんなの
ないな…香水でいつか

エリナ「ファブ〇ーズはないけど香水なら…」

お燐「あっいいいよいいよ」

お燐「それよりもよかつたら地底を案内するよ！」

霊夢「そっちの方がいいわね」

エリナ・幻夢（まず匂いをなんとかしてくれえ！）

お燐「じゃ、行くまえに死体集め終わるまでまっててね！」
ダダダダダ

エリナ「嗅覚がおかしくなる…」

ステイレット「新鮮な空気が吸いたいわ…」

幻夢「まあ今はまだマシだろ…」

お燐「お待たせにや！」

エリナ「ぐっ！」

お燐「じゃあいくよー！」

??? 「なんだあの人間面白そうだな。鬼の力見せてやろう…」

続く

響く鬼？響かない鬼？

前回色々ありSAN値がやばい気がする今日この頃
あり？なんでここにいるんだっけ？

……あ、異変か

あくやばいやばい、それはもう色々と
で？ここが地底？

まあ想像してたけど天井高いなあ
ステイレット「予想以上に町街してたわね？」

エリナ「いや、色々と所々崩れてるから町街としては……言
えるのかな？」

轟雷「多分言えないと思います」

幻夢「てかなんだ町街って」

お燐「あの化け物をこいし様が連れて来た時は、時々暴れましたか
らね」

魔理沙「嘘だろ?!」

霊夢「所詮は化け物ね」

そうだ、ちよつと前に見た幻覚はこう言ってたな

アトレウス『ドラウグルだ!』

クレイトス『さて!早まるな!』

……だっけ?

多分化け物の名前はドラウグルだと思ってるいいのかな?

それにしても色々と崩れてるな

幻覚「……ん？」

エリナ「ん?どうした?幻夢？」

幻覚「いや、みんなは先行ってて、ちよつと寄り道して来る」

魔理沙「おい、今は異変解決中だろ!道草は「まあいいじゃない」霊
夢?!」

霊夢「地底に興味でも持ったんでしよう?なら少しくらい自由に
てあげなさい」

魔理沙「でも!」

霊夢「それに、神社に来る前、その化け物と戦って来たのでしょ？
なら少なくとも平気よ」

魔理沙「それは……そうか……」

お燐「なら幻夢さんの案内は私に任せて！」

霊夢「そうね、お願いするわ」

エリナ「ステイレット……ゴニヨゴニヨ」

ステイレット「ゴニヨゴニヨ……分かったわ」

幻夢「ん？どうした？」

エリナ「いや、なんでもない、元気でね」

ステイレット「骨とパーツは拾ってあげるわよ」

お燐「それ私の仕事！」

幻轟「死ぬ前提になってる?!」

party out: 幻夢・轟雷・お燐

お燐「で？なんで急に？」

轟雷「そうですね、どうしたのですか？」

幻夢「いや、確か……この辺りに人影が」

異変じゃなくても人通りが悪そうな道を進んでいく

地底そのものもそうだが、薄気味悪い

???「流石に気づいたか」

幻夢「ツ！誰だ！」

お燐「あれ？この声って……」

轟雷「待っててください！………
上です！」

そう言われ、刺された方を見上げると

???「よう、人間」

デツケエ皿持った鬼がいた

幻夢「嘘だろ？なんでもありかよ、ここ」（てかなんで皿？）

お燐（勇儀だ………待って嫌な予感がする、逃げよ）

轟雷「あれは鬼ですか？」

幻夢「じゃあねえの？」

???「自己紹介がまだだったな」

勇儀「私は勇儀、星熊勇儀だ、見ての通り鬼だ」

勇儀「ちよつとお前らの事が気になってだな、けど1人だけか……
まあいいや」

轟雷「、気になった、とは？」

轟雷が、”気になった”の言葉の意味を聞くと、突然勇儀が

勇儀「まあ、言っちゃえば、こうだ！」

幻夢「おわツ!？」

突然、勇儀が飛び込んで来たので、バックステップで避けた

俺がいた場所には砂煙が舞い、それが晴れば、勇儀の地面は凹んでいた

幻夢「おいおい…… 本当になんでもありかよ」

勇儀「ズバリ、こういう事」

なに？俺を消そうってか？

幻夢「…… いいぜ、受けて立つ」

轟雷「幻夢?!」

幻夢「轟雷は下がってる、お隣も…… いつの間になくなったんだ？まあいいや」

勇儀「おう、分かってくれてるねえ？」

幻夢「そりゃそんなに殺気立っていればな」

『ガシヤコンバグバイザー』『シヤカリキスポーツ』『ガシヤット』『シヤカリキスポーツ！』

BGM『M e g a l o G r i l l e d B a c k』

バグバイザーを構えて、目標を睨みつける

勇儀「おいおい、そんな眼を向けなくてくれよ、興奮するじゃないか」

幻夢「お前は何処の変態だ！ハアア！」

そう叫びながらも、勇儀に向かって走り出す

幻夢「ゼヤアアアアア！」

勇儀「……フンッ！」

幻夢「へ？……ゴハッ！」
なにが起きた?!

斬りつけようとしたらいつのまにか腹を蹴られていた

幻夢「クソ、まだまだあ！」

勇儀「遅い、ハッ！」

幻夢「ガハア！」

あれからも何度も攻撃しているが、返討ちにされる
これは不味い、一度距離を「させるかあ！」ちよ！

勇儀「はあ！」

幻夢「グウウウ！」

勇儀「お？耐えたか」

こいつ、こつち（一度距離を「させるかあ！」ちよ！）に入ってきて
やがって

ただ、奴の攻撃は防いだ！

今、奴とは零距离だ！

幻夢「やられっぱなしでいられるかあ！」

幻夢「ハアアアアア！」

バグバイザーを上へ、下へ、右へ、左へと何度も振った
だがしかし、当然の如く避けられる

幻夢「クツソ、チャンス逃した！」

勇儀「動きが単調なんだよ、この数回の攻撃で見切った」

幻夢「見切った……？なら！」

『ドレミファビート』『ガシヤット』『ドレミファビート！』

幻夢「これならどうだ！」

俺は、リズムボムを勇儀の目の前で爆発させ、砂煙をあげる

勇儀「ほう……だが、これじゃあ視界が悪いのはお互いじゃ？」

幻夢「ああそうだ、だがそれでいい！」

『マイティアクションX』『ガシヤット』『マイティアクションX！』

幻夢「はあ！」

トリツキービームを、勇儀がいるであろう場所の周りを撃つ
やはり光弾だからか、砂煙の中でもよく見える

勇儀「おいおい、何処に撃ってる?」

幻夢「これでいい!轟雷!」

轟雷「了解!」

轟雷は、砲身を勇儀の方と向ける

砂煙が晴れ、フルブーストチェンソーの準備をする

「ドラコナイトハンターZ」「ガシャット」『ドラコナイトハンターZ!!
?』

幻夢「ふう……………」

勇儀「おっと?余裕でも出たのかい?目えつぶっちゃって」

幻夢「26%……………」

勇儀「ん?」

幻夢「32……………39……………45……………53……………」

勇儀「なにする気だ?まあいい……………やッ?!」

轟雷「FIRE!」

先程撃ったトリツキービームが、今になって勇儀を襲った
追い討ちで轟雷の砲撃をも喰らった

勇儀「くう……………まさかこの為の弾幕か……………」

幻夢「75……………83……………90……………」

勇儀「させるか!」

轟雷「させません!」

轟雷の砲撃が、再び勇儀の背中を襲う

幻夢「100!時間稼ぎサンキュー!轟雷!ウオオオオアアアア
アアアア!!!」

勇儀「ふふふふ……………ハハハハ!!面白い!かかってこい!」

勇儀は、いつのまにか取り出した焼酎を飲み干し、構える
そして、睨み合っている最中、とある者、手を手に抱える

幻夢「行くぞおおおおお!」

勇儀「かかって来い!!」

幻夢『ドラコナイトクリティカルストライク!フルブースト!』

エリナ視点

幻覚「……………ん？」

エリナ「ん？どうした？幻夢？」

幻覚「いや、みんなは先行ってて、ちよつと寄り道して来る」

魔理沙「おい、今は異変解決中だろ！道草は「まあいいじゃない」霊夢?!」

霊夢「地底に興味でも持ったんでしよう？なら少しくらい自由にしておきなさい」

魔理沙「でも！」

霊夢「それに、神社に来る前、その化け物と戦って来たのでしょ？なら少なくとも平気よ」

魔理沙「それは……………そうか……………」

お燐「なら幻夢さんの案内は私に任せて！」

霊夢「そうね、お願いするわ」

エリナ「ステイレット……………ゴニヨゴニヨ」

ステイレット「ゴニヨゴニヨ……………分かったわ」

幻夢「ん？どうした？」

エリナ「いや、なんでもない、元気でね」

ステイレット「骨とパーツは拾ってあげるわよ」

お燐「それ私の仕事！」

幻轟「死ぬ前提になってる?!」

エリナ「さていくか」

ステイレット「そうね。拾う箱なら用意できてるわ」

魔理沙「本当に死ぬ前提になってる…」

エリナ「そういえばなんだけど、ここらへんの住民はどんな人がいるの？」

霊夢「そうねー、まずパルシイにお燐、ヤマメにあとーよく来るこいしとか」

エリナ「小石？」

霊夢「小石じゃなくてこいし」

ステイレット「字幕は見てる人しか見えないんだからわかんないわよ」

作者妹「めたいわ！」

エリナ「ステイレット、メタ発言ダメ」

エリナ「そんでこいしってどんな人？」

霊夢「えーつと無意識な子で地霊殿の主人の妹ね」

???「そうだよ」

エリナ「無意識な子？」

???「心をとぎしたのー」

エリナ「へーじゃあおねいさんも閉ざしちやったのかな」

???「ううん、おねいちゃんは心が読めるのー」

霊夢「そうそう古明地姉妹揃ってサードアイがあつてね」

エリナ「えなにそれ」

???「こんな形ー」

エリナ「えきも」

???「ちよつとちよつときもいはないよー」

エリナ「あうん、なんかごめん」

???「いいよー」

ん？

あれれ〜おかしいぞー

エリナ「じゃあいきましょか」

霊夢「そうね」

魔理沙「おう」

ステイレット「ええ、地味に体重いけどいきましよう」

え地味におも……………

霊夢「?どうしたのエリナその顔どこを見て……………」

魔理沙「ふたりともどうし……………」

ステイレット「?なに、わたしの髪の毛にえなにか付いているのかしら」

エリナ「あ…………頭…」

???「バランス悪いなあ!」

霊夢「こいしー…!!!!おきなさー…!!!!」

魔理沙「ステイレット!!!!頭をおもいつきりふれー…!!!!」

ステイレット「え??わ、わかったわ」(ぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん)

???「おわわわわ!」《シユタツ(綺麗な着地)》

こいし「やあやあわたしはこいしー!」

エリナ「むっ無意識ってこのことかよ!?!」

ドゴオオオオオオオン

!!!!!!!

エリナ「え!?!」

エリナ怒りポイント70%

幻夢その後

幻夢

幻夢「ふうふううう……」

轟雷「大丈夫ですか？流石にやりすぎです」

幻夢「それ心配してるのかしてねえのか分かんねえよ」

勇儀との戦闘を終え、すぐの事

勝利したのは、幻夢と轟雷である

勇儀「ははは……負けちまったよ……」

轟雷「で、どうしていきなり勝負を仕掛けてきたのですか？」

幻夢「そうだよ、確か、気になった、って言ってたが」

勇儀「言葉通りの意味だ……外から来た外来人に興味を持ったただけだよ」

なんだ、本当に気になっただけか
てつきりどつかの刺客かと思っただよ

幻夢「まあ、とりあえずた立て、ほれ」

そう言っつて、手を差し出す

勇儀「おう、ありがとう」

轟雷「鬼とは気になったらすぐに戦闘を仕掛ける種族なのですか？」

勇儀「殆どがそうだな、すげえ好戦的なんだよ」

幻夢「そうなのか？そうだとしたら、此処ら一帯更地になってるだろ？良く建物とか普通に残ってんな」

勇儀「そこら辺はしつかり考慮してるさ、力自慢だけが鬼じゃねえんだ」

でも此処ら辺の建物が（俺らの所為で）半壊している事は言わないでおこう

勇儀「で？何しに来たんだい？只の観光じゃなからうに」

幻夢「おっとそうだった、異変解決に来たんだった」

轟雷「あの、この辺りで巨大な化け物を見ませんでしたか？角が生えていて、石柱を持っているのですが」

勇儀「いや、知らねえなあ、さつきまで寝ててよ、起きて散歩してたらあんたらが目に入ったんだ」

幻夢「Oh……寝起きで良くあそこまで出せるな……」

勇儀「まあな、力自慢だけが鬼の長所だからな！」

轟雷（さつき言っている事が違うのでは？）

勇儀が言ったことに矛盾を感じたが、あえて口にしなかった轟雷であつた

轟雷「幻夢、そろそろエリナ達と合流を」

幻夢「おう、そうだな、てな訳でまたな」

勇儀「おう！今度はもう一人も連れてこいよ！」

と、そんなこんなで話を切り上げ、解散した俺達であつた

来た道に戻り、エリナ達が向かったであろう道へと進む

幻夢「轟雷、こつちで合ってる？」

轟雷「はい、そちらに多数の生命反応があります……？」

幻夢「ん？どうした轟雷？」

轟雷「あの、異変解決に来た人数は、お燐や幻夢、私を含めて7人ですよ？」

幻夢「そうだな、俺、轟雷、エリナ、ステイレット、霊夢に魔理沙、

お燐だけど……それが何か？」

轟雷「いえ、生命反応が5つなんです」

幻夢「5つ？お燐がそつちに行つたと「待つて〜！」……無くなつたな」

轟雷「無くなりましたね」

お燐「ちよつと！なんで先に行くのさ！」

幻夢「お前がどつか行くからだろ!?何俺達が悪いみたいな言い方してんだよ！」

そんな言い争いをしながらも、向こうにいる5人目について考えていた

幻夢（異変解決に来たのは6人、そこにお燐が加わってるから7人）
轟雷（そして、私、幻夢、お燐はその7人から外れて行動していま
すから、向こうが4人のはず）

幻夢（まさか、勇儀みたいな鬼に接触しているとか?）」

轟雷（わかりません、たった今、その5人目の生態について調べて
みましたけど、やはり情報が少ないです）

轟雷（強いてわかることは体格、しかし、戦えそうな体つきではあ
りませんが……子供?）」

お燐「ん?どうしたの?二人してだんまりしちゃって?」

轟雷「幻夢!とりあえず急ぎましょう!」

幻夢「だな!悪いが飛ばすぞ!しっかり捕まれよ!」

お燐「へ?」

急に抱えられたお燐は何のことか知らずに、轟雷はコートのポケッ
トに素早く入り込み、俺は上空に飛び、（最近忘れ去られかけていた）
スチームを足から噴射し、ジェット機のように飛んでいった

お燐「なんでええええええ?!」

こいしと出会った

エリナ「んであなたが古明地こいしってことか」

こいし「そうだよー？私の能力は無意識を操る程度の能力！」

エリナ「え無意識って操れるもんなの？」

霊夢「一応嫉妬とかもあやつれつひともいるからね」

ウワアスゴイナー（棒）

エリナ「まあこいしさんはともかく」

こいし「こいしでいいよー♪」

エリナ「あっはい」

エリナ「それでさっきの爆発音は何？」

魔理沙「もしかしての幻夢になんかあつたんじゃね？」

霊夢「ステイレット、あっちの状況って見えないの？」

ステイレット「できるわ」

ステイレット「あっちに生命体反応が4つあるわ」

霊夢「4つ？」

魔理沙「何かおかしいことがあるのか？」

エリナ「私達は霊夢、魔理沙、私、ステイレット、轟雷、幻夢、そ

してお隣で七人」

ステイレット「そしてそのうち四人が私達だからあっちは三人のはず」

魔理沙「確かにそうか」

こいし「もしかしてのおねーちゃんかなー♪」

ステイレット「どうやら幻夢と戦っているようだけど、これは…鬼

？」

エリナ「鬼!？」

こいし「鬼？じゃあ萃香ちゃんか勇儀さんかなー♪」

エリナ「とりあえず合流した方がいいかな？」

霊夢「いやでもこっちから何か歩いてくるわよ？」

???「いつてててて、？何かいるのか？」

こいし「あ！勇儀だ♪」

勇儀「なんだこいしと博麗の巫女と魔法使いと人間か」
ステイレット「私は違うわよ！」

霊夢「どうしたのよ。そんなボロボロで」

勇儀「実はな少し人間と戦ってたんだよ。確か幻夢と轟雷だったっけ？」

エリナ「えっ幻夢？」

勇儀「確か…お前が妹だろう？どうだ？ここで一騎打ちしてみないか？」

エリナ「イヤイマハチョットイヤツスネハイ」

勇儀「いいじゃない…いやあとででいい」

魔理沙「え？どうしたんだ？」

霊夢「何かいるわね」

グガアアアアアアアアアアアア!!

つぎの瞬間きつもちわるい怪物に囲まれた

ステイレット「推定数百匹くらいかしら」

勇儀「今は手を組もうじゃないか妹」

エリナ「エリナと呼んで」

霊夢「良い？くるわよ！」

グガアアアアアアアアアアアア!!!

勇儀「フツ！」

グガアアア!?

ステイレット「もう一気に決めるわよ！」

エリナ「ああ！」

スペルカード発動！「サンダーストーム！」「ミルクィウェイ！」「夢想封印！」「弾幕のロールシャッハ！」「怪力乱神！」

ドガアアアアアアアアアア!!!!

エリナ「うつわやりすぎたー」

やりすぎてほとんど建物が、ボツロボロ

「勇儀「ほとんど日常茶飯事だからいいだろ」

こいし「あー持って帰つとけばよかったー」

魔理沙「いやダメだろ」

エリナ「そうだろ……うん？」

霊夢「どうしたの？」

エリナ「こいしさとりさんのところに案内してくれる？」

こいし「いいよ♪それじゃあしゅっぱつなのだー♪」

エリナ「最初からこうすればよかったー」

久し振りだなあ！皆様あ！

今現在、超特急でエリナの向かった方角へと向っている
だが

幻夢「オイオイ、いくら何でも遠すぎねえか？移動スピード早すぎ
じゃね？向こう」

お燐「そんなはずないよ？勇儀と戦ってる時間もほんの15分か2
0分くらいだったし、すぐ追いつくと思うんだけど、ていうか急に抱
えて飛ばないでよ！ビックリしたじゃん！」

幻夢「おう悪いな、急いだ方がいいと思っただけだから、後で魚でも振
る舞ってやるよ」

お燐「やったくー！」

ちよろい

そんなことより、いつまでもエリナ達の姿が見えない
どうしてだ？

轟雷「……………」

幻夢「どうした轟雷？さっきから静かだが……………」

轟雷「幻夢、一度止まってもらえますか？」

幻夢「え？ああ」

轟雷に言われ、その場に静止する

【BGM:あの、家庭教師ヒットマンリボンの、なんかシリアスなと
きに流れる……………あの……………えっと……………何でもないです(ω・ω)】

お燐「で？どうしたの？」

轟雷「……………現在地座標、特定できません、ステイレットとの通

信も不可」

幻夢「は？マジで？マップ出せる？」

轟雷「出せますが……………こちらです」

轟雷が出した周辺マップには、中心に自分達であろう黄色い点があ
るが、他は砂嵐の如く、座標や方角は『ERROR』

周りを見渡すと、先程まであった筈の建物が無くなり、木々が生い

茂る景色が見える

完全に知らない場所へと足を運んでしまったようだ

幻夢「オイオイどうすんだよ……」

取り敢えず状況を整理するため、一度地面に降りる

轟雷「ここは何処なのでしようか？」

幻夢「お燐、ここ何処だ？」

お燐「私もこんな所知らないよ？」

幻夢「となると…… ホントに何処だ？んー…… あ、そうだ」

オレは、マイテイクションXガシヤットとバグバイザーを取り出す

トリツキービームで木々の中を照らし、道を見つけようと考えた

『マイテ・・アクシ・・』

幻夢「ん？あれ？」

ガシヤットが起動しない

他のガシヤットも起動しようとするが、同様に起動しない

試しにバグバイザーのみでの射撃も試すが、不発

幻夢「あ？壊れた？」

轟雷「そのガシヤットとバイザーから私たちと同じ様なエネルギーを感じます、恐らくエネルギーの再充填が必要なのかと」

幻夢「まじか……」

バグバイザーが使えないとなると、他のガシヤットも使いようが無いってこった

となると、残る武装は、能力によるスチームと、デビルトリガー、身体変化による装甲と、ハザードトリガー

まあまだなんとかなる方か

幻夢「ちとキツイな……」

お燐「……… ねえ」

幻夢「ん？どうしたお燐？」

轟雷「幻夢、後方右側、何か聴こえませんか？」

幻夢「？」

轟雷に言われ、その方向に耳を澄ます

確かに、よく聴くと足音の様なものが聴こえる、それも複数
一人一人（そもそも人か怪しいが）の足音は、一定ではなく、不規
則な音となり聴こえる

幻夢「二人とも、戦闘態勢に入れ」

轟雷「了解です」

お鱗「OKだよ」

お鱗は猫のように身体を、轟雷は肩の砲台を、俺はスチームによつ
て作られた剣を、それぞれ構えた

次第に足音は大きくなるが、未だに姿は見えない

その方向に、意識を向ける中、途端に足音が止む

幻夢「どうだ轟雷、スキヤンはできるか？」

轟雷「……………いえ、恐らく大分近くに来てはいるようですが、捉え
られません」

??「ダロウね」

お鱗「ツ?!ヒャアアア!!」

知らない声と、お鱗の悲鳴で後ろを振り向く

前方に集中し過ぎた為に、別の何かに気づけなかった

その人物は、茶の着物を纏い、肌と見れる箇所は真っ黒

瞳は白く、不気味に笑っているであろう口からは、歯が、中心を堺
に片方のみ生えている

幻夢「……………テメエ、誰だ？」

額に汗を流しながら、恐る恐る口を開く

??「僕カい？名乗ル名前ハ無イケド……………アイツガ白イカ
ら……………クロ……………ナンテドウダい？」

ようこそ地霊伝へ

こいし「ここだよー!!」

霊夢「結構久しぶりに来たわね…、地霊殿、」

エリナ「…地霊殿、広いね」

こいし「そうでしょそうでしょ？みーんなー!!」

？「あれあれ？お客さんですかこいしさまー」

こいし「お空！そうだよ！おねえちゃんはいまどこ？」

ステイレット「お空…っていうのね、…」

魔理沙「どうかしたか？ステイレット」

ステイレット「いえ、気にしないで」

エリナ「…」（そういえば幻夢と離れたままだけど…大丈夫かな？）

お空「さとりさまは…、わかんないです。仕事してるんじゃないですかー？」

こいし「了！ありがとうございます！みんなこっちだよー！」

霊夢「ええ」

あら？騒がしいわね

お客様かしら

こいし「おっねえちゃんは〜どっこ、かな〜♪」

エリナ「テンション高いなあ…姉妹かあ」

ステイレット「……」

霊夢「ねえ、ステイレット、さつきからどうしたの？」

ステイレット「…少し壊れてもしたのかし」「は?」「!?」

エリナ「うそ、え、今すぐにでもメンテナンスしないと…」

ステイレット「ちよ、ちよつと待って、まだわからないから…」

魔理沙「ドライバーならあるぜ?」

霊夢「魔理沙は魔理沙でなんで持つてるのよ」

魔理沙「…それは、な? 一式揃えて方が一パチュリーのほ(ゲフンゲフン、念のためだぜ?)」

エリナ「察し」

霊夢「泥棒魔法使いは放っておいて:「おい」結局なんで壊れてるとかいいだしたのよ?」

ステイレット「…いえ、幻夢達の現在地が特定できなくて:…それに、轟雷との連絡が取れないのよ」

エリナ「:…?地底の知らないマップにいるんじゃない?それとも何かに巻き込まれたとか…」

ステイレット「:…そうかしら」

魔理沙「実の兄が大変な目に遭っているかもしれないのにドライだなあ:…」

エリナ「まあ:…あいつなら平気ですよ」

魔理沙「幻夢涙目だろうな」

こいし「たのもー!!!」

?「:…こいし、おかえり」

エリナ「:…この子が」

こいし「おねーちゃん!!」(´、ω、`)(´)(´)Σ≡ズドーン

?「つと!…危ないわねこいし」なでなで

こいし「えへへ、ただいま!!!」

？「ふふ、おかえり、お客様を連れて来たのね。博麗の巫女に白黒魔法使い、噂の人間に人形に勇氣まで」

勇氣「結構久しぶりじゃあないか？」

エリナ「まだついて来てたんだ…」↑忘れてた

勇氣「おいおいひどすぎないかい？」

エリナ「悪気は…ナイヨ」

霊夢「それで、さととり、今起きてる異変についてなにか知ってることはあるかしら？」

さととり「いえ、私はなにも知らないわ」

エリナ（…こいしと違って服にくつついてる目は開いてるんだな）

さととり「そうよ、こいしは閉じてしまったもの」

エリナ（あ、そーなんだ…：…：…：…ん？）

さととり「ふふ、可愛いマヌケ顔ね、私はさととり妖怪、心を読むことが出来るわ、それが私の程度の能力だもの」

エリナ「…そう」

さととり「ふふつ、よろしくね？エリナ」

エリナ「…ええ、よろしく」

霊夢「さて…幻夢達と合流したいけどあいつらの居場所がわからないし」

さととり「あら、もう行くの？お茶でも飲んでいかないかしら、お茶菓子もあるわよ？」

霊夢「本来なら食いつくところだけど今は異変解決が先よ」

魔理沙「いいんじゃないか？あつちにはお燐もいるし、いずれここに来るだろ」

霊夢「仕方がないわね…ほらお茶菓子を出すのよ」キリッ

エリナ「うわあ…」

「アイツ、モウ絡ミニ言ツタノネ、まあいいワ、僕も」

アソボツカナ

く番外編く

幻夢の一日

〔幻夢の一日〕

6：30 起床

幻夢「ふあく………… おやすみ」

く7：00 二度寝

轟雷「幻夢、おはようございます、そろそろ7時ですよ」

幻夢「お、もうそんな時間か、おはよう、轟雷」

7：10 身支度

幻夢「さてと、轟雷、今日は？」

轟雷「一緒に行きます」

幻夢「OK、準備しな」

く9：00までトレーニング

幻夢「ふうく、いい汗かいた」

轟雷「お疲れ様です」

9：10 風呂

幻夢「いやあく、やっぱ汗流した後の風呂はいいなあ」

9：30 朝食

咲夜「召し上がれ」

皆「「いただきます」」

9：50 適当に読書

幻夢「魔法ねえ………… 使えたら便利なんかねえ」

轟雷「幻夢の能力の一部も魔法の様なものではありませんか」

幻夢「それを言っちゃあ終わりぜよ」

10：35く11：15 勉強

幻夢（えつと………… a二乗＋b二乗〓c二乗だから………… x二

乗〓3二乗＋5二乗で…………）」

11：20 風にあたる（たまに）

幻夢「………… たまには風に当たるのもいいな、轟雷」

轟雷「……………そうですね、幻夢」

11：30 武器の手入れ

幻夢「バグバイザーは……………故障なし、サムライエッジは……………

大丈夫、レッドクイーンは……………『ブルオオオオン!!』うし」

幻夢「ハザードトリガーは……………まだ使わないし拭くだけにしよ」

12：00 昼ご飯

咲夜「召し上がれ」

皆「「いただきます」」

12：20 射撃場の整備

轟雷「幻夢、こつちにゴミが」

幻夢「あいよ……………と言っても、殆どが空薬莖なんだけどな」

13：20 散歩する

轟雷「今日は何処へ？」

幻夢「人里へ、テキトーにぶらぶらと歩こうかなって」

14：00 レミリアとチエス

幻夢「うーん……………ほい」

レミリア「そう来たわね……………はい」

幻夢「引つかかった！チエックメイト！」

レミリア「ツ?!しまった！」

15：00 デザート

今回はコーヒーゼリー

フラン「いただき！」

幻夢「あ！ちよまでえい！」

15：30 フランの相手

幻夢「今日は何する？」

フラン「えつとね！コレ！」

幻夢「なになに？……………なんでマリカーがあんだよ」

16：30 外で格闘技の練習

幻夢「フツ！ハツ！ヤツ！」

美鈴「やっぱり幻夢さんはキレがいいですね！」

幻夢「ハハハ、そんなこと言ったって美鈴にはまだ届かねえよ」
17:30 エリナと軽く組手

幻夢「フツ！ハツ！あぶっ！よっ！あだ?!」

エリナ「ハツ！よっ！セイ！ヤア！ハアア！あ！ごめん！」

18:30 筋トレ

幻夢「988.....989.....990.....901.....あれ？」

19:00 風呂

幻夢「いやあく、やつぱ汗流した後の風呂は（以下略）」

19:30 ストレッチ

幻夢「ツ.....はあく、何処ぞの殺人鬼みたいに、今日もぐっすり眠れるな」

幻夢「どうせ寝る前にもつかいやるんだけど」

20:00 晩御飯

咲夜「召し上がれ」

皆「「いただきます」」

20:30 研究

幻夢『見せられないよ!』

21:00 寝る

幻夢「ツ.....はあく、何処ぞの殺人鬼みたいに、今日もぐっすり眠れるな」

轟雷「幻夢、おやすみなさい」

幻夢「おう、オヤスミ」